

【事例④】 交流の充実につなげる「理解推進授業」の取組

事例の概要

【知的障害特別支援学校小学部2年生 Dさん】

地域指定校の児童・生徒に、障害のある児童・生徒に関する事前の情報が不足していると、実際の交流場面においてどのように接してよいか分からず、戸惑いが見られることがあります。

そこで、本事例では、直接交流の前に、知的障害特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが地域指定校において、交流する児童の学校生活の様子や好きなこと・得意なこと、気を付けてほしいことなどを伝える「理解推進授業」を行いました。

その結果、地域指定校の児童は、障害のあるDさんへの理解を深めて、自分から積極的に関わり、Dさんと一緒に交流活動に取り組むことができました。

また、「理解推進授業」で学習した内容に基づき、学級活動においてDさんが参加しやすい交流内容や方法についての話し合いが行われ、交流活動の一層の充実につながりました。

Dさんも、地域指定校での交流に積極的に参加するようになりました。

交流活動への期待

【地域指定校の児童への期待】

- 「理解推進授業」を通して、Dさんのことを知り、一緒に交流を楽しむ姿勢を身に付けてほしい。

【Dさんへの期待】

- 地域指定校の児童と仲良く交流することができるようになってほしい。

期待する姿を引き出すための工夫

特別支援学校では

■ 交流前の「理解推進授業」の設定

地域指定校の児童の理解が深まるよう、直接交流を行う前に、Dさんも参加する「理解推進授業」を設定しました。

■ 分かりやすい資料や活動の工夫

地域指定校の児童が分かりやすいように、写真等を活用した説明を行いました。

また、Dさんの学校生活の様子を紹介とともに、クイズを通してDさんの得意なことを知らせる活動を設定しました。

小学校では

■ 交流の合言葉の設定

学級の中で、交流に向けての合言葉を「みんなで楽しむ」と決め、児童一人一人が交流に積極的に参加できるようにしました。

■ 交流内容の話し合いの設定

「理解推進授業」で学習した内容に基づき、学級活動において、Dさんとの交流内容を話し合う機会を設定しました。

「理解推進授業」と交流の様子

■ 「理解推進授業」の様子

- Dさんの学校生活の様子や好きなことを伝えると、地域指定校の児童は興味深く聞いている姿がありました。
- また、Dさんが好きな「電車クイズ」を行ったときには、次々に電車の名前を答えていくDさんに、地域指定校の児童はとても驚いていました。
- 地域指定校の児童が、Dさんの保護者に質問をする場面もあり、保護者は一つ一つの質問に丁寧に答えていました。



■ 交流活動の様子

- 校庭で遊んだときには、地域指定校の児童がDさんに「こっちだよ」と声をかけて遊具に誘ったり、「一緒に遊ぼう」と声をかけたりするなど、自然な形での関わりが見られました。
- また、音楽の時間には、音楽室に入って来たDさんに、地域指定校の児童が「ここに来て」と声をかけて机を用意するなど、積極的な関わりが見られました。
- みんなでDさんの好きな歌を歌う場面もあり、Dさんは一緒に大きな声で歌を歌っていました。とても楽しそうでした。

「理解推進授業」の成果

本交流事例では、「理解推進授業」を実施したことにより、以下のような成果がありました。

- (1) 地域指定校の児童が、「理解推進授業」を通してDさんについて知ることができたため、実際の交流場面では、自分から積極的に関わることができました。
- (2) 地域指定校の学級で交流の合言葉として、「みんなで楽しむ」と決めたことにより、地域指定校の児童がDさんと一緒に交流活動を楽しむことができました。
- (3) 地域指定校の児童が、学級活動でDさんと一緒に活動できる内容の話し合いを行ったことで、Dさんを迎える準備が充実していきました。
- (4) 地域指定校の児童が、地域でDさんに会ったときにも、積極的に声をかけてくれるようになりました。
- (5) 年度初めに、地域指定校と特別支援学校の学級担任、特別支援教育コーディネーター、管理職が集まり、直接交流の打ち合わせを行ったことで、円滑に直接交流ができました。
- (6) Dさんの保護者からは、以下のような感想が聞かれました。
 - ・ 地域指定校のお友達が我が子のことを知って、積極的に関わってくれています。その優しい気持ちをととても嬉しく思います。Dと地域指定校のお友達が共に過ごす時間はとてもありがたく、先生方にも感謝しています。



この事例から、「理解推進授業」の実施は、地域指定校の児童・生徒が障害のある児童・生徒についての理解を深め、充実した交流活動へつながることが分かりました。

【事例⑤】 中学校の部活動を活用した直接交流

事例の概要

【知的障害特別支援学校中学部3年生 Eさん】

直接交流は、特別支援学校の児童・生徒一人一人が参加しやすいように、地域指定校と特別支援学校が連携して、交流する場面や内容などを創意工夫する必要があります。

そこで、本事例は、特別支援学校中学部の生徒が得意なことを活かして交流ができるように、地域指定校の部活動（生活奉仕部）における交流を行いました。

その結果、Eさんは積極的に活動に取り組むことができたとともに、他の部員との関わりも増えていきました。また、他の部員も、Eさんと一緒に活動することを通して、自然な関わりができるようになりました。

Eさんにとって、生活奉仕部の活動が分かりやすかったため、交流を行う日は意欲的に中学校へ出掛けて行き、他の部員と関わりながら熱心に取り組む姿が見られました。

交流活動への期待

【地域指定校の生徒への期待】

- Eさんについて知り、同じ生活奉仕部の部員として一緒に活動できるようになってほしい。

【Eさんへの期待】

- Eさんがにとって活動が分かりやすく、部員が少人数の部活動に参加することで、安心して地域指定校の生徒と交流ができるようになってほしい。

期待する姿を引き出すための工夫

特別支援学校では

■ 自己選択を促す機会の設定

部活動の日程や活動内容を知らせ、活動に参加するかどうかを自己選択する機会を設定しました。

■ 交流後の評価

交流後は、クラスや家庭でEさんの頑張りを評価し、次回の交流活動への意欲につなげられようにしました。

中学校では

■ 校内の部活動との調整

Eさんが好きであり、見通しが持ちやすい活動を特別支援学校から聞き取り、校内の部活動との調整を行いました。

■ コーディネーターによる連絡調整

特別支援教育コーディネーターが校内の窓口となり、部活動顧問・部員との連絡調整を行いました。